お茶の水女子大学附属学校園での実践を基にした
実践事例報告

1．実践した学校園・授業者：旭川市立神楽中学校・中本　厚

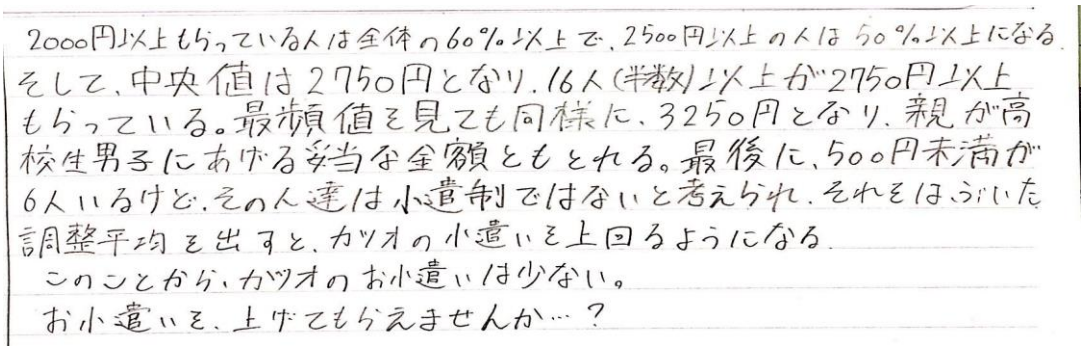
2．学年・教科等・単元等：中学校第１学年・数学科・「資料の整理と活用」

3．基にした実践の学校園：お茶の水女子大学附属中学校

4．基にした実践：「累積度数」
（お茶の水女子大学附属学校園算数・数学部会編著（2018）『「データの活用」の授業～小中高の体系的指導で育てる統計的問題解決力～』，pp.110-115 より）

5．実践の概要

本時は，本単元の第 8 時に当たる。基の実践のねらいは，「累積度数の必要性と意味について理解すること」であるが，本実践では前時に学習している。自身の小遣いの月額を親に上げてもらうために，いかに自分の額が他と比べて少ないのかを主張する問題場面やその方法を他者と協働的に考える場面を設けていることなど参考にする点が多い。そこで，本時は問題場面（データは自作）を生かし，目的に応じて適切な代表値を選択するための方法を小グループ内や全体で議論を重ね，最後に自身で判断できるように授業を構成した。以下の図は本実践における生徒の記述例である。


2000円以上もらっている人は全体の60%以上で、2500円以上の人は50%以上になる。
そして、中央値は2750円となり、16人(半数)以上が2750円以上
もらっている。最頻値を見ても同様に、3250円となり、親が高
校生男子にあげる妥当な金額ともとれる。最後に、500円未満が
6人いるけど、その人達は小遣制ではないと考えられ、それをはぶいた
調整平均を出すと、カツオの小遣いを上回るようになる。
このことから、カツオのお小遣いは少ない。
お小遣いを、上げてもらえませんか…？

6．実践してみた感想など

生徒にとって問題の場面設定が現実的であり，主体的に追求しようとする姿が見られた。また，自分が最初に選択した代表値を代える生徒や複数選んで説明する生徒など，よりよい解決方法に向けて考えが変容していく様子が見られ，小グループや全体の話し合いが有効に機能していた。場面だけを提示して，母とカツオくんどちらかを選び，お互いの主張を代表値を用いて議論するのも面白いと考える。